

早期白話における“是”構文に関する一考察

楊, 明
九州大学大学院地球社会統合科学府

<https://doi.org/10.15017/1913911>

出版情報：地球社会統合科学研究. 8, pp.121-127, 2018-03-01. 九州大学大学院地球社会統合科学府
バージョン：
権利関係：

早期白話における“是”構文に関する一考察

ヨウ
楊

メイ
明

はじめに

上古漢語ⁱにおいて“是”が主に指示詞として使用され、中古時期に至ると、指示機能が衰退してコピュラとしての機能が強くなった。“是”構文の意味変遷及び、その文法化ⁱⁱプロセスを究明するために、本稿では、早期白話時期の『遊仙窟』と『大唐三蔵取経詩話』における“是”構文の全体像を把握した。“是”は『遊仙窟』には37例、『大唐三蔵取経詩話』ⁱⁱⁱには80例あり、全て取り上げて考察した結果、「是」をコピュラとして使用している頻度が非常に高いこと、及び副詞と“是”が共起関係にあること、つまり「NP、副詞+“是”NP」という構文の出現頻度が高いということが明らかになった。

一 “是”の定義及び先行研究

19世紀末の『馬氏文通』(1898-99)では、“是(……なり)”“非(……にあらず)”などの用語は、おおむね主語と述語の間にあり、判断を下す意味を持つことから、「断詞」と名付けられている。品詞体系の中での“是”の位置づけに関しては、多様な研究結果があり、学説も多岐にわたっている。黎(1924)と太田(1958)は“是”を「同動詞」、王(1937)、呂(1942)、高(1949)は“是”を「繫詞」とした^{iv}。また、楊(1930)、張(1959)、丁(1961)らは“是”の用法を「動詞/判断動詞」とした。さらに、張(1960)はVPの前に出現する“是”を副詞とみなした。

品詞体系の中での“是”の位置づけは、未だ見解の一致に至っていないが、これらを調査した鳥井(2008)^vは、“是”を「判断動詞」という名称で統一した。しかし、本論では“是”の品詞属性には触れず、また、日本国内では、“是”構文をコピュラ文として研究する先行研究が多いため、“是”を主に「コピュラ」という名詞で統一することにしている。

現代漢語における“是”に関する先行研究は、古川(1989)、張(2003)、中田(2015)など数多くあり、近年、大河内(1997)、李(1999)、西山(2001)、魏(2003)、陳(2016)など、古代漢語における“是”に関する語法研

究も増えつつある。

しかし、現段階では“是”に関する記述的分析にとどまっており、“是”の文法化に関する変遷の動因、機能についての説明、また発展変遷についての規則分析に関する研究は少ない。数少ない規則分析の中にも、問題点が指摘できる。例えば、董(2004)は、「副詞」+“是”の語彙化は明清時代から形成されると述べているが、筆者の調査によると、遅くとも中古時期から、“是”と「副詞」の共起関係が見られる。

二 研究目的及び方法

先行研究によると、コピュラ“是”の起源は、中古時代に遡る^{vi}。よって、“是”の文法化プロセスを考察するためには、この時期の言語研究は極めて重要である。

本論は、中古と近世の間の過渡期にある早期白話期の『遊仙窟』(以下略『遊])、『大唐三蔵取経詩話』(以下略『大])及び、補助資料として『世説新語』(以下略『世])を研究対象とし、“是”構文を総体的に考察することにする^{vii}。“是”の使用頻度を把握して、“是”を機能により分類し、典型的な用例を取り上げ、“是”の使用特徴を分析することで、意味変遷のプロセスを考察する。

日本語訳は、訳本を参考にしたが、“是”の前後の文脈をより明瞭にするために筆者が一部変更を行った。本文中では、以下のように原文、出典、日本語訳を記す。

例： ---原文--- (書名・底本の巻数)
(-----日本語訳-----)

三 『遊仙窟』及び『大唐三蔵取経詩話』における“是”構文の調査結果

3.1 『遊仙窟』における“是”に関する調査結果

『遊仙窟』における“是”の使用回数は37例であった。“是”を以下のように分類した。

3.1.1 “是”の指示詞としての用法

“是”が指示詞として使用されたのは、わずか2例で

あった。ここでは、2例を挙げる。

例① 書云：“導河積石，至于龍門。”即此山是也。（『遊』・一）

（『書経』に「積石から龍門に至る黄河の流れは、禹の大土木事業による」とある。まさに積石山のことである。）

例② 五嫂咏曰：“……是時日將夕，携樽就樹蔭。”（『遊』・四）

（五嫂が詠じた、「……そのとき日も傾き出したので、樽を手に木陰に場所を移しましょう」とある。）

例①では、“是”が述語として用いられる指示詞で、例②では、連体修飾語として“時”を修飾する用例である。

3. 1. 2 “是”の形容詞としての用法

“是”が「正しい」「良し悪し」のような形容詞として解釈される用例は1例しかない。

例③ 仆斂容而答曰：“……非吏非俗，出入是非之境。”（『遊』・二）

（私は居住いを正しく答えた、「……俗物ではないと思いますが、いつまでも俗物根性を引きずっており、良悪の両界に出入りする。」）

例③の“是”は否定意味の“非”と共に使用され、「良し悪し」「正しいかどうか」を示す。

3. 1. 3 “是”のコピュラとしての用法

残りの34例の“是”は、全てコピュラとして使用されている。ここでは代表的な2例を取り挙げる。

例④ 女子答曰：“此是崔女郎之舍耳。”（『遊』・一）

（女は答えた、「こちらは崔家のお嬢様がお住まいです。」）

例⑤ 五嫂為人饒劇，掩口而笑曰：“娘子既是主人母，少府須作主人公。”（『遊』・二）

（五嫂は戯れが好きで、口を覆って笑いながら言った、「十娘は女主人なのだから、あなたが男主人役になれば、釣り合いも取れてよ。」）

例④では、“是”が、指示詞“此”と“崔女郎之舍”との関係を判断するものとして使用されている。例⑤では、副

詞“既”が“是”を修飾することで、“娘子”と“主人母”との関係が強調されている。

3. 2 『大唐三蔵取経詩話』における“是”構文

『大唐三蔵取経詩話』における“是”の使用回数は80例であった。

3. 2. 1 “是”の指示詞としての用法

“是”が指示詞として使用される用法は8例である。ここでは2例を挙げる。

例⑥ 明皇共車与法師回朝。是時六月末旬也。（『大』下・第十七 到陝西王長者妻殺儿处）

（明皇は法師と車を共にされて、都にご帰還あらせられました。この時は六月下旬です。（『大』下・第十七 陝西の王長者の妻が子を殺せしこと））

例⑦ （猴行者）后帰東土唐朝，遂吐出于西川。至今此地中生人参是也。（『大』中・第十一 入王母池之処）

（（猴行者は）のちの帰り道で、蜀の西で吐き出しました。今もこの地に産する人参がこれでございます。（『大』中・第十一 王母の池に入りしこと））

例⑥と例⑦は“是”の指示詞としての用法である。例⑥は“是”が後ろの名詞“時”を修飾する用法である。例⑦は“……是也（述部）”として用いられる用例である。

3. 2. 2 “是”のコピュラとしての用法

“是”のコピュラとしての用例は71例である。ここでは2例を挙げる。

例⑧ 法師曰：“前去都无人烟，不知是何処所？”（『大』中・第十 經過女人国処）

（法師は曰く「この先どこにも人家がないようだが、いったいどこなのだろう。」（『大』中・第十 女人国を過ぎしこと））

例⑨ 猴行者曰：“我師不用前去，定是妖精。”（『大』上・第六 過長坑大蛇嶺処）

（猴行者は曰く「我が師匠はお近づきしないでください。あのものは物の怪に違いません。」（『大』上・第六 長坑・大蛇嶺を過ぎしこと））

例⑧と例⑨は、“是”がコピュラあるいは判断動詞として利用された例である。“前去都无人烟(的地方)”と“何処所”、“(前のもの)”と“妖精”との関係を判断した。特に、例⑨では、副詞“定”を使って判断の程度を明らかにした。

3. 2. 3 “是”の副詞としての用法

“是”が副詞「あらゆる、すべて」の意味として利用された例が1例ある。

例⑩ 羅漢問曰：“今日謝師入宮。師善講經否？”玄奘曰：“是經講得，无經不講。”(『大』上・第三 入大梵天王宮)

(羅漢が問う「今日は遠路ご苦労でございます。ところで、法師は経を講ずることがおできますか。」玄奘は曰く「たとえいかなる経なりとも、講ずることができないものはございませぬ。」(『大』上・第三 大梵天王の宮殿に入りしこと))

例⑩では、“是”が副詞として後ろにくる“経”を修飾する。「あらゆる経」「経である限り」「すべての経」という意味になる。

四 『遊仙窟』及び『大唐三蔵取経詩話』における“是”構文に関する考察

4. 1 指示詞“此”+コピュラ“是”というフレーズ

指示詞“此”とコピュラ“是”というフレーズは、『遊仙窟』には5例あり、『大唐三蔵取経詩話』には12例ある。ここでは、各1例ずつ取り挙げる。

例⑪ 女子答曰：“此是崔女郎之舍耳。”(『遊』・一)
(女は答えた、「こちらは崔家のお嬢様がお住まいです。」)

例⑫ 師行過了，合掌擎拳。此是宿縁，天宮助力。(『大』中・第十 經過女人国処第十)

(法師たちはそこを通り過ぎると、合掌して天王に感謝いたしました。これも前世の宿縁で、大梵天王にお助けいただいたものと思われます。(『大』中・第十 女人国を過ぎしこと))

例⑪と⑫は、指示詞“此”の後ろに“是”が来るという代表的な用例である。『世説新語』においても、同様の用法が16例存在する。上古漢語において二つの語は共に強い指示性をもっているが、唐五代になると、“此”は指

示性が強い指示詞として使用されているが、“是”の機能は柔軟化していることがわかる。

このような変化について、西山(2001)は、「上古漢語には明らかに指示詞“是”の用法があったが、それが中古漢語になるとこの指示詞の用法はだんだんと衰退していった。中古漢語の繫詞の明らかな特徴は、“是”に副詞の修飾成分が前置された形式が有るということであり、上古漢語にはそういった用法は無いということである。指示詞が繫詞となった理由は、やはりこの三分指示と関連が有るのである。三分指示の指示詞において上文を受ける文脈指示の場合、その指示詞は一般に中称であり、近称や遠称の場合はある意図を有した一種の有標(marked)な表現である。よってもっとも一般的である中称の“是”が虚化され繫詞“是”となったのである。“此”が虚化されなかった理由は“此”が近称であったところにあるのである」と指摘した。

4. 2 動詞+コピュラ“是”というフレーズ

動詞+“是”の用例が1例ある。

例⑬ 痴那曰：“夜半見有一人，称是甘露王如来。”(『大』下・第十七 到陝西王長者妻殺儿処)

(子は曰く「真夜中ごろ、人がやってきて甘露王如来って言いました。」(『大』下・第十七 陝西の王長者の妻が子を殺せしこと))

例⑬では、動詞“称”の後ろに“是”が来ることで、“是”は前の動詞を修飾して強調する。同じ用法は『世説新語』にもみられる。「張乃維舟而納之。問其姓字，稱是劉遺民。(『世』・任誕第二十三)(張玄はついに船を繋ぎ合わせて彼を迎え入れた。彼の名字を問うと、劉の遺民と称する。)

4. 3 副詞としての“是”

先述べたように、例⑩の“是”は副詞の機能に属する。董・蔡(1994)は、副詞としての“是”は、よく名詞の前に用いられ、この用法は普遍的であると強調した。この用法は中古漢語において、よく見られる。例えば、晉・陶淵明「飲酒」二十首之十八に「殤來為之盡，是豁(曾本云，一作語)無不塞。」とある。この“是+豁”とは、「豁りである限り」「すべての豁り」という意味である。

4. 4 「副詞」が“是”の前に現れる現象

『遊仙窟』及び『大唐三蔵取経詩話』における「副詞+“是”」の用法は、それぞれ13例と41例あり、出現頻度が高い。「副詞+“是”」の代表的な用例を付録として挙

げる。

ここで、特に言いたいのは“是”の活用の仕方が多様であるということである。肯定を強調する「当+“是”」「正+“是”」「直+“是”」「実+“是”」と、事実を承認する「故+“是”」と、ある種の範疇を指す「皆+“是”」「俱+“是”」などの用法は、現代漢語にもよく用いられている。

また、六朝時代に属する『世説新語』における“是”を調べてみると、使用回数は259例で、そのうち指示詞が78例、形容詞が5例で、コピュラが175例あった。その中で、「副詞+“是”」の例文が多い。「故+“是”」8例、「自+“是”」8例、「皆+“是”」6例、「乃+“是”」5例、「定+“是”」5例、「並+“是”」5例、「當+“是”」4例、「正+“是”」3例、「便+“是”」3例、「似+“是”」3例、「則+“是”」2例、「最+“是”」2例、「本+“是”」2例、「直+“是”」2例、「為+“是”」2例で、その他、「実+“是”」「誠+“是”」「同+“是”」「疑+“是”」「既+“是”」「自然+“是”」「且+“是”」「居然+“是”」「最+“是”」「應+“是”」「雖+“是”」「必+“是”」「特+“是”」「殆+“是”」「迺+“是”」「偏+“是”」が1例ずつあった。

『世説新語』と『遊仙窟』及び『大唐三蔵取経詩話』を比較すると、『遊仙窟』及び『大唐三蔵取経詩話』は『世説新語』より指示詞の用法が少なくなり、機能が柔軟になって、繫辞としての用法が強くなったことが明らかである。特に、内容語から機能語に変遷するプロセスには、副詞との共起現象が無視できない。

その文法化の過程は、李(1999)、西山(2001)などでもすでに言及された。李(1999)は、指示詞の“是”は、前方照応的な機能を持っていたが、この照応機能の低下に伴い、文脈の前後関係を判断する機能が強くなってきたと述べている。さらに、「照応機能」の減退と「提示機能」の増長、ひいては「判断機能」への拡張は、“是”の文法化の道筋であると指摘する。

また、周(2007)は、“是”の使用変化は文法及び語意上のニーズに応えたものではないとし、語用上、情報構造を明らかにする目的で生じたものである。言語使用者が前文と後文の間に“是”が出現したことを見ると、前文が判断された成分で、後文が判断する成分であることがわかる。そのため、“是”が判断関係を標識する記号になる。その標識する機能こそが、繫辞の機能であり、“是”が指示詞から繫辞に変化してきた最も重要な要因であると言われている。

五 まとめ

本論では、『遊仙窟』及び『大唐三蔵取経詩話』における“是”の使用状況を分析した。『遊仙窟』では37例、『大

唐三蔵取経詩話』では80例を取り上げられ、「是」がコピュラとしての使用頻度が非常に高いこと、及び“是”とその前に来る副詞と共起すること、つまり「NP, 副詞+“是”NP」という構文の出現頻度が高いということが明らかになった。これだけで早期白話における「是」の使用状況を全面的に敷衍できるとは言えない。しかし、今回の考察の対象は、中古から近世にわたって編纂された書であり、内容も範疇が広いため、“是”の全体的な使用状況や特徴機能が明瞭になったと言えよう。

六 さらなる課題

早期白話期のほかのテキストを用いることで、より広い範囲で“是”構文の考察を行う。そして、“是”の前に出現した副詞を分類し、“是”と共起する規則を分析する。また、指示詞から変遷した“是以”などの連詞の語彙化も考察したい。

注

- ⁱ 語法、語彙、語音によって、漢語の時期区分の基準は異なる。本論は、性質の変遷を考察するため、太田(1988)、西山(2004)の理論を参照した。
- ⁱⁱ 文法化とは、1912年にフランスの比較言語学者 Antoine Meilletにより作られた用語である。文法化理論については Hopper・Traugott(1993)を参照した。
- ⁱⁱⁱ 『大唐三蔵取経詩話』の成立時代について未だに見解の一致は認めない。多くの研究者は南宋での成立を支持するが、本論は李・蔡(1997)の観点を支持する。李・蔡(1997)は、『大唐三蔵取経詩話』と宋代の話本、唐五代の変文を比較して、体制及び表現形式、具体内容及び思想傾向、語彙及び文法現象などの多様な面において、『大唐三蔵取経詩話』は前者に比べ、後者との類似性が強いことを明らかにし、『大唐三蔵取経詩話』が遅くとも唐五代～北宋の間にすでに成立していたと論じた。現存する本のうち、最も一般的なものは、大倉文化財団蔵の宋版に基づいて校訂したものであり、三卷十七章(第一と第八章の一部を欠く)から成っている。
- ^{iv} 風間(2012)は、内心構造であることを明示的に表示する要素をリンカー(繫辞/Linker)、外心構造であることを明示的に表示する要素をコピュラと呼びことにした。しかし、本論では、世界の諸言語に関する通時的な考察は行わないため、「繫辞」と「コピュラ」の区別はしない。
- ^v 鳥井(2008:78)によれば、1950年以前は“是”は同動詞、

繫辞と呼ばれ、その後、判断詞、今は判断動詞と呼ばれている。

^{vi} 繫辞“是”の起源について、王 (1937) は六朝前後、周 (1950) は兩漢頃と提唱している。

^{vii} 資料選定は、太田 (1958) と西山 (2004) の理論を参考にした。

付録

付録 ① 『遊仙窟』における「副詞+是」の代表的な用例

「乃+是」 4例	例⑭ 五嫂笑曰：“張郎才器， <u>乃是</u> 曹植天然。”（『遊』・四）
「定+是」 1例	例⑮ 仆即咏曰：“未必由詩得，將詩故表伶。聞渠擲入火， <u>定是</u> 欲相燃。”（『遊』・二）
「恰+是」 1例	例⑯ 十娘斂手而再拜向下官，下官亦低頭尽礼而言曰：“向見称揚，謂言虚假；誰知対面， <u>恰是</u> 神仙。”（『遊』・二）
「亦+是」 1例	例⑰ 十娘曰：“五嫂亦応自来，少府遣通， <u>亦是</u> 周匝。”（『遊』・二）
「实+是」 1例	例⑱ 余乃咏曰：“……真成物外奇稀物， <u>实是</u> 人間断絶人。”（『遊』・二）
「直+是」 1例	例⑲ 下官咏曰：“忽然心里愛，不覺眼中伶。未关双眼曲， <u>直是</u> 寸心偏。”（『遊』・三）
「総+是」 1例	例⑳ 十娘曰：“儿等并无可收彩，少府公云‘冬天出柳，旱地生蓮’， <u>総是</u> 相弄也。”（『遊』・四）
「終+是」 1例	例㉑ 十娘乃作別詩曰：“別時終是別，春心不值春。”（『遊』・五）
「即+是」 1例	例㉒ 下官咏曰：“……何須杏樹岭， <u>即是</u> 桃花源。”（『遊』・四）
「既+是」 1例	例㉓ 五嫂為人饒劇，掩口而笑曰：“娘子 <u>既是</u> 主人母，少府須作主人公。”（『遊』・二）

付録 ② 『大唐三藏取經詩話』における「副詞+是」の代表的な用例

「尽+是」 8例	例㉔ 法師合掌向前，獅子拳頭送出。五十餘里， <u>尽是</u> 麒麟。（『大』上・第五 過獅子林及樹人国）
----------	--

「都+是」 5例	例㉕ 定醒之中，滿山 <u>都是</u> 白虎。（『大』上・第六 過長坑大蛇岭処）
「別+是」 4例	例㉖ 猴行者知師意思，乃云：“我師莫訝西路寂寞，此中 <u>別是</u> 一天。前去路途，尽是虎狼蛇兔之処……此去人烟，都是邪法。”（『大』上・第四 入香山寺）
「若+是」 3例	例㉗ 猴行者一見，高声便喝：“汝是何方妖怪……若是妖精，急便隱隱藏形迹； <u>若是</u> 人間閨閣，立便通姓道名……”（『大』上・第六 過長坑大蛇岭処）
「乃+是」 3例	例㉘ 法師曰：“此行者亦是大羅神仙……今見他說小年曾來此処偷桃， <u>乃是</u> 真言。”（『大』中・第十一 入王母池之処）
「又+是」 2例	例㉙ 迤邐登程，遇一座山，名号“香山”，是千手千眼武菩薩之地， <u>又是</u> 文殊菩薩修行之所。（『大』上・第四入香山寺）
「便+是」 2例	例㉚ 主人曰：“我新婦何処去也？”猴行者曰：“馱子口辺青草一束， <u>便是</u> 你家新婦。”（『大』上・第五 過獅子林及樹人国）
「甚+是」 2例	例㉛ 次早起来，七人嗟叹：“夜來此処 <u>甚是</u> 蹊跷！”（『大』上・第五 過獅子林及樹人国）
「只+是」 2例	例㉜ 法師聞柄姉語，心如半醉：“然我七人， <u>只是</u> 对鬼說話？”（『大』中・第九 入鬼子母国処）
「亦+是」 2例	例㉝ 至天曉，猴行者曰：“此中佛法， <u>亦是</u> 自然。”（『大』下・第十五 入竺国度海之処）
「定+是」 2例	例㉞ 猴行者曰：“我師不用前去， <u>定是</u> 妖精。”（『大』上・第六 過長坑大蛇岭処）
「莫+是」 2例	例㉟ 法師曰：“此 <u>莫是</u> 蟠桃樹？”（『大』中・第十一 入王母池之処）
「转+是」 1例	例㊱ 其人不言不語，更无応対。法師一見如此， <u>転是</u> 恚惶。（『大』中・第九 入鬼子母国処）
「即+是」 1例	例㊲ 早起，七人約行十里，猴行者后：“我師，前去 <u>即是</u> 獅子林。”（『大』上・第五 過獅子林及樹人国）

「最 + 是」1 例	例③ 法師白曰：“此中仙景，最是聰明。佛教方所，望垂旨示！”（『大』下・第十五入竺国度海之処）
「除 + 是」1 例	例③ 答曰：“……山頂一門，乃是佛居之所。山下干余里方到石壁，次达此門。除是法師會飛，方能到彼。”（『大』下・第十五入竺国度海之処）
「极 + 是」1 例	例④ （国王）又設齋供一筵，極是善美。（『大』中・第九入鬼子母国処）

テキスト及び訳本

『世説新語校箋』（南朝宋）劉 義慶 撰 徐 震顎 著 中華書局 1984 年本
 『遊仙窟』（唐）張 文成 撰前野 直彬 訳 『六朝・唐・宋・小説集』中国古典文学全集；第 6 卷 平凡社 1959 年本
 『遊仙窟』（唐）張 文成 撰 竹田 晃・黒田 真美子 編 成瀬 哲生 著『中国古典小説選 4 古鏡記・白猿伝・遊仙窟』明治書院 2005 年本
 『大唐三蔵取経詩話校注』李 時人・蔡 鏡浩 校注 中華書局 1997 年本
 『大唐三蔵取経詩話全訳』太田 辰夫 訳 『大倉文化財団蔵宋版大唐三蔵取経詩話』汲古書院 1997 年本

参考文献（年代別）

【英語文献】

Hopper, Paul J. & Elizabeth Closs Traugott 2003 Reprint. Grammaticalization. (Cambridge Textbooks in Linguistics.) Cambridge: Cambridge University Press. Original edition 1993.

【日本語文献】

太田 辰夫 1958 『中国語歴史文法』 江南書院 pp.121-125
 太田 辰夫 1988 『中国語史通考』 白帝社
 大河内 康憲 1975 「“是”のムード特性」『中国語の諸相』 白帝社 pp.27-52
 李 長波 1999 「古代中国語の指示詞とその文法化について」『ことばと文化』3:45-72 京都大学大学院人間・環境学研究科文化環境言語基礎論講座
 西山 猛 2001 「古代漢語『是』字中の繫詞の產生與指示代詞的發展」九州大学大学院言語文化研究院『言語科学』第 36 号, pp.113-119

西山 猛 2004 「古代漢語文法研究における時期区分の再設定」『呉語読本』音声データの作成と公開（平成 14-15 年科学研究費補助金 [基盤研究 C-2] 研究成果報告書, 論文・翻訳編（第一冊）） pp.25-29
 鳥井 克之 2008 『中国語教学（教育・学習）文法辞典』編著 東方書店
 風間 伸次郎 2012 「コピュラ文の諸相」影山太郎・沈力（編）『日中理論言語学の新展望 2 意味と構文』 pp.85-106. くろしお出版
 中田 聡美 2015 博士論文「中国語における“是”構文の意味と機能」大阪大学 14401 甲第 18184 号
 陳 怡君 2016 「從繫詞「是」的結構看漢語指示代詞的語法演變」日本中国語学会第 66 回全国大会 予稿集 好文出版 pp.37-38

【中国語文献】

馬 建忠 1898-99 『馬氏文通』（章錫琛 校注『馬氏文通校注』中華書局 1954 年本）
 黎 錦熙 1924 『新著国語文法』商務印書館
 王 力 1937 「中國文法中的繫詞」清華大學學報 1937 年 1 月 12 卷 1 期
 呂 叔湘 1942-44 『中国文法要略』商務印書館 1982 年本に拠る
 高 名凱 1948 『漢語語法論』開明書店 pp.71-295
 周 法高 1950 「上古語法札記」『中央研究院歷史語言研究所集刊』第二十二本 pp.171-207
 張 志公 主編 1956 『語法和語法教学——介紹“暫擬漢語教学語法系統”』新華書店
 張 靜 1960 「“是”字綜合研究」河南人民出版社
 丁 声樹 等 1961 『現代漢語語法講話』商務印書館
 古川 裕 1989 「副詞修飾“是”字情況考察」『中国語文』第 1 期, pp.19-31
 董 志翹・蔡 鏡浩 1994 『中古虚詞語法例釈』吉林教育出版社 pp.482-483
 魏 培泉 2003 「上古漢語到中古漢語語法的重要發展」『古今通塞：漢語的歷史發展』 pp.75-106 第三屆國際漢學會議論文集語言組
 張 誼生 2003 「“副 + 是”的歷時演化和共時變異——兼論現代漢語“副 + 是”的表達功用和分布範圍」『語言科学』第 3 期, pp.34-49
 董 秀芳 2004 「“是”的進一步語法化：由虚詞到詞內成分」『当代語言学』第 1 期, pp.35-44
 蔣 紹愚 2005 『近代漢語研究概要』北京大学出版
 周 國正 2007 「從漢語信息結構框架看繫詞「是」形成的動因」『臺大文史哲學報』第六十六期 pp.1-16 臺灣大學文學院

A Case Study Focusing on “Shi” in Early Vernacular Chinese

Yang Ming

The word “Shi” was used as a demonstrative in Archaic Chinese. Its index function declined and its function as a copula became common in Ancient Chinese. To explore the syntax and grammaticalization of “Shi”, this paper explores “Shi” in Early Vernacular Chinese through databases made of the texts ‘You Xianku’ and ‘Datang Sanzang Qujing Shihua’.

There are 37 examples of “Shi” in ‘You Xianku’ and 80 examples in ‘Datang Sanzang Qujing Shihua’. Through consideration of all the examples, it was revealed that the frequency with which “Shi” was used as a copula and that “Shi” has a high co-occurrence relationship with Adverbs. That is to say, the pattern of “NP, Adverb + “Shi” +NP” appears frequently.